

第二帝政期ドイツにおける酒場と「政治」

原 田 昌 博

(キーワード：労働運動, 酒場, アルコール, 政治, 公共圏)

はじめに

ナチスの権力獲得直前である1933年1月末から1934年にかけての共産党の反ファシズム闘争を描いたヤン・ペータゼンの小説『われらの街』(1936年)の冒頭に、ベルリン・シャルロテンブルク地区の共産党員が翌日のデモを前に拠点である酒場に集まるシーンがある¹⁾。この酒場(居酒屋ヴェルナー Lokal Werner)の前には2名1組の見張りが立っており、合言葉「ローテ・フロント」を交わして主人公たちが中へと入る。酒場の壁にはナチスの発砲によるたくさんの弾痕が残っている。「リヒャルトがドアを開ける。がやがやした話し声のうず。太った白髭の店主がカウンター越しに会釈する。彼の妻は真っ赤な顔をしてコップを洗っている。天井にはタバコの煙が立ち込めている。室内は張り詰めた空気がいっぱい、ほくの神経はたちまちピンと反応する。真ん中の大きいテーブルを囲んで、興奮した一団が立っている」。酒場には自転車に乗った若い共産党の伝令係が指示を伝えに来て、集まった同志たちは翌日のデモ行進の確認をして、酒場を後にしていく。

ワイマル共和国末期には、ナチスや共産党など政治的諸党派が都市の中に独自の酒場を持っていた。「常連酒場 Verkehrslokal」と呼ばれた各党派の酒場にはそれぞれのメンバーが日常的に出入りし、飲食のみならずさまざまな政治的活動を行っていた²⁾。そこは情報交換の場であり、政敵への襲撃計画作成の場であり、政敵への襲撃の際の「基地」であり、政敵の攻撃に対する「砦」であり、武器の隠匿場所であった。つまり、酒場と政治的暴力は不可分の関係にあり、酒場は政敵との街頭闘争の拠点となっていたのである。ペータゼンの小説に出てくる「居酒屋ヴェルナー」もそうした数多ある常連酒場の一つであり、政治における「街頭」の重要性が格段に増したワイマル共和国末期において、こうした政治化した酒場(政治的酒場)は街頭での政治的暴力を語る上で欠くことのできないものとなっていった。

ところで、ベネダーが「酒場の歴史はほとんど人類の歴史と同じくらい古い。…酒場は社会生活の最も深部に根づいている」と指摘し、シュタルツィンガーも「主人(ホスト)と客(ゲスト)」の関係を「人類史の根源的現象」とみなして「旅館 Gasthof や酒場 Kneipe は疑いなく重要な文化史的証拠である」と述べているように、酒場自体の歴史は古代にまで遡ることができる³⁾。史料上で確認される最古の酒場は5500年前のバビロニアの「クバハ Kubaha」という施設だと言われている⁴⁾。もっとも、古代ギリシャの時代から中世盛期の11世紀ごろまで、富裕層や中流階級においては旅行者(外来者)のもてなし(飲食と寝場所の提供)は主として私邸で営まれており、それは商業的な営業行為ではなく「自由なもてなし freie Gastlichkeit」と呼ばれるボランティア行為であった⁵⁾。もちろん、営業行為としての酒場も古代より存在していたが、そこを訪れる客はもっぱら下層民に限定されていた。こうした私的行為としてのもてなしを越えて、職業としての接客業(飲食・宿泊業)が成立するのは11世紀ないし12世紀ごろと言われる。中世盛期における人の移動の増大(巡礼・商業など)が個人的な接客から専門職としての接客業への発展を促し、その中で酒場も発展することになり、「ゲスト=金を払う客」,「ホスト=商業的経営者」という関係が成立した。こうした酒場には外来の旅行者のみならず地元の住民たちも出入りするようになり、中世においてすでに酒場は客層(社会的身分)、提供するサービス、あるいは経営者によって分化していくことになった。さらに16世紀ごろには酒場の営業許可が制度化(看板免許制 Schildgerechtigkeit)されることで、酒場は副業ではなく本業として専門職化していった。18世紀末のドイツ語圏では、約80000軒の酒場が存在していたという⁶⁾。

本稿が対象とする近代に入ってから酒場を、コンスタンチンは社会的地位の高い者の社交場所としての酒場(カフェやワイン酒場 Weinstube)と労働者たちが集う「いかがわしい酒場」に大別している⁷⁾。都市の街角にある「街角酒場 Eckkneipe」が後者の典型とされるが、こうした酒場は「酒を提供する/酒を飲む場所」だけで

はなく、そこに集う人々の「コミュニケーション・社交の場」としても機能していた。ヴェーデマイヤーはそうした点を重視して「“酒場 Kneipe”について語る場合、それにより意図されるのは社会的行為の場所、社交形態である」と述べ、酒場研究の意義を「政治文化における空間と結びついた社交形態の機能」の解明に求めている⁸⁾。

こうした文脈での酒場に関する研究が本格化するのは1980年代以降である。シュヴィツベによると、それは主として「特殊な社会空間」としての酒場の社会学的・社会心理学的研究や民俗学的研究であり、後者には労働者文化と酒場の関係、大都市における余暇や近隣社会の社交の場としての酒場の分析、あるいは農村における居酒屋の機能分析が含まれる⁹⁾。その中で、労働者と酒場・アルコールの関係にいち早く取り組んだのがロバーツであり、その問題関心は「ドイツ労働運動における酒場の役割」や「酒場生活と政治的生活の特に密接な関係」の解明、「文化」という文脈での労働者の飲酒行動の研究であった¹⁰⁾。

しかし、労働者と酒場（あるいはアルコール）の関係の分析としては労働者のアルコール消費（飲酒癖）の問題やそれに対する禁酒運動の研究が中心であり、政治的社交の場としての酒場の分析は、ロバーツの一連の研究を除き、1990年代に入ってようやく提出されるようになった。1991年のギールの研究は、飲酒文化や酒場についての社会史的・文化史のあるいは日常文化・民俗学的な研究の必要を訴え、酒場を次のように特徴づけた。「工業化プロセス、労働運動、プロレタリア的生活様式へと組みこまれ、酒場 Kneipen は社会史的には労働者の余暇と政治活動の積み替え所 Umschlagplatz として出現した¹¹⁾」。

さらに1992年には、エイブラムスが以下のように述べている。「歴史研究はもっぱら労働者のアルコール消費の批判者を扱ってきたため、労働者ミリューにおけるアルコールと酒場の多様な機能はまだ解明されていない。…もちろん、多くの家庭ではアルコール消費が過剰となり、そこから借金が生じたり、妻や子どもに対する暴力が発生した。飲酒儀礼によって強められた男らしさはしばしば公共空間での騒動や犯罪行為へと悪化した。しかし、酒場の本来の機能は都市労働者文化の中心的基点であることだった。訪れた者たちは酒を飲むだけではなく、カードやビリヤードも行い、九柱戯をして、ギャンブルを嗜み、遍歴芸人たちを楽しんだ。彼らは日々の政治や個人的問題を議論した。酒場は職業安定所、賃金支払所、ダンスホール、協会会館 Vereinslokal、読書室として機能した。さまざまな要求に応えるべく、営業許可を受けた施設の数に19世紀中に急速に増大した¹²⁾」。エイブラムスによると、労働者層にとって、こうした酒場は労働者の「余暇の文化 Freiheitkultur」の一端をなすものであり、80年代以降の「下からの社会史（日常史）」研究の進展がその解明に寄与することになった¹³⁾。しかし、伝統的な労働運動史研究が広範な政治文化へのアクセスを可能にするはずの労働者の日常性に目を向けることはなかった。「労働者層のどちらかと言えば伝統的で政治志向の叙述は19世紀後半や20世紀初頭におけるこの日常生活の要素をなおざりにしてきた¹⁴⁾」。

こうした労働運動史の陥穽については、最近の研究でも指摘されている。例えば、ホフロックは労働運動における日常性の問題を「もう一つの労働運動 andere Arbeiterbewegung」と呼び、労働運動と酒場・アルコールの関係を検討する必要性を唱えている。「“もう一つの労働運動”というテーゼが示すのは、階級闘争の歴史を政党や組織の活動に短絡化させないということである。しかし、経営内の基盤に目を向けることも労働運動の出来事全体をカバーするものではない。というのも、経営は労働者たちの生活世界のごく一部に過ぎず、これに私的なものが加わるからである。すでに1968年よりはるか以前にこの私的なものが政治的であった。…つまり、誰が誰と一緒に食事をしたり飲んだりするかは、ある社会の社会的・政治的構造の理解にとって中心となるものである¹⁵⁾」。酒場・アルコールの問題が労働運動史における研究上の陥穽であったとすれば、酒場研究におけるさらなる陥穽が上述した「コミュニケーション・社交の場」としての酒場という視点であった。シュタルツィンガーはこの点について次のように述べている。「社会的行為の場や社会的アイデンティティの供給者としての酒場の機能は、すでにこの機能に関しては数多くの証拠が存在しているにもかかわらず、圧倒的になおざりにされている¹⁶⁾」。

こうした研究上の指摘から明らかになるのは、近代における酒場の政治化の問題である。ベネダーは日常の中で酒場が担った役割を「秩序の安定化機能」と「体制への反抗的機能」の相反する二つの側面から説明している。それは、近代において酒場が「陰謀の場、政治的な計画の製造所」として政治的領域と直接的に結びついていたことを示唆するものである¹⁷⁾。先述したように、ワイマル期には酒場が政治的アジテーション・集会の場所、さらには政敵への攻撃への拠点として重要な役割を果たしたが、酒場の政治化はすでに第二帝政期に始まっていた。本稿では、ワイマル期の政治的酒場の実態を検討していくための準備作業の一環として、第二帝政期のドイツにおける労働運動と酒場の関係の検討を通じて、酒場と「政治」の関係、あるいは酒場の政治的機能の端緒を明らかにしていきたい¹⁸⁾。

1. 19世紀ドイツにおけるアルコール消費・酒場・労働者

(1) アルコール消費の状況

19世紀に入り工業化が進展する中で、都市に増大していく労働者の生活にアルコールは広く浸透したが、この当時考えられていたアルコールの機能は、①渴きをいやす飲料（飲料水の不衛生や他の非アルコール飲料の希少や高価格のため）、②栄養・エネルギー源（アルコール、特にビールの栄養的特性への信仰）、③薬（強壯剤・鎮痛剤・消化剤・麻酔剤など）であった¹⁹⁾。

さらに、飲酒行為はその目的から①「手段的飲酒 *instrumentales Trinken*」、②「社会的飲酒 *soziales Trinken*」、③「麻酔的飲酒 *narkotisches Trinken*」に区分される²⁰⁾。「手段的飲酒」とは、生理的欲求から喉の渴きをいやすため、あるいは栄養・エネルギーを摂取するために行われる飲酒であり、「酔い」それ自体を目的としない。この種の飲酒行為は家庭のみならず職場でも19世紀後半まで広く行われており、工場の異常な気温への耐性、労働で摂取した有害物の除去、単調な工場労働に対する気晴らしといった様々な理由から飲酒が行われていた。しかし、この「手段的飲酒」は労働者の栄養状況の改善、職場からのアルコールの追放、非アルコール飲料の低価格化や飲料水の衛生的・質的改善、労働運動による「節制」の働きかけなどの影響を受けて20世紀初頭には衰退していった。「社会的飲酒」とは個人的な人間関係や親密性の中で行われる社交的な交わりを目的とした飲酒である。これは、もともと村落での祝祭などで行われていた共同体生活に組み込まれた飲酒行為が工業労働者層の増大に伴って都市部にも持ち込まれたものであった。この飲酒では酩酊行為は排除され、むしろアルコールを通じたコミュニケーションが中心となる。最後に「麻酔的飲酒」とは、「酔う」ことで現実から一時的に逃避し、飲酒者が抱える心理的抑圧を意識的に緩和するための飲酒である。それは通常の実的手段では解決できない問題からの逃避行為であるが、酩酊状態、ひいてはアルコール依存（飲酒癖）が生まれる背景にもなった。こうした飲酒のパターンの中で、「社会的飲酒」が都市労働者の社交の場としての19世紀後半の酒場の発展には重要である。さらに、この飲酒の広まりには、飲酒対象がアルコール度の高いシュナップス（火酒）からビールへと変化していったことも大きく影響していた。

19世紀前半の東エルベの農村地域では、領主が醸造所を作り、シュナップスを労働対価の一部として現物支給していた。この時期、シュナップスは薬事的な効果も期待されて過剰に消費されたため「火酒ペスト *Branntweinpest*」と呼ばれる悲惨なアルコール摂取状況を招いていた²¹⁾。19世紀中葉以降には、シュナップスが都市部にも広まり、とりわけ長時間のきつい肉体労働が求められる業種（炭鉱・金属工業・レンガ製造業・建設業・造船業・パン工房など）では労働中にも摂取されるようになった。「職場での飲酒は19世紀初頭には禁止されるのではなく、規範 *Norm* だった。…職場での酩酊はそれゆえ最初の世代の経営者によってはっきりと推奨されていた²²⁾」。アルコール度の高いシュナップスの摂取はアルコール依存（飲酒癖）と容易に結びつくことになり、後述するように禁酒運動を生み出す背景にもなった。

19世紀後半から20世紀初頭にかけてのドイツでのアルコール消費量は1870年代半ばを頂点に山なりの動向を示していた²³⁾。それは1850年代から70年代にかけて増加し、73・74年頃にピークを迎えた。70年代後半から80年代にかけて横ばいになった後、アルコール消費量は80年代半ばに大きく落ち込んで、一旦横ばいになり、1900年代の半ばに再び減少している。2度の落ち込みの原因としては、1887年の課税強化に伴う火酒価格の引き上げ、さらに1906年のビール、1909年のビールと火酒に対する増税が挙げられる。総じてみれば、ドイツにおけるアルコール消費量は世紀転換期に明らかな減少傾向を示しており、1899年から1913年にかけて一人あたりのアルコール消費量は25%の減少を記録している。労働者に限っても、世紀転換期にはそのアルコール消費量は減少していたが、その背景にはレンガ製造業や建設業などのいくつかの産業を除き職場でのアルコール摂取が禁止され、代わって非アルコール飲料が提供されるようになったことや、食事の栄養状況が改善され、アルコール抜きでも高いカロリー摂取が可能になったことが考えられる²⁴⁾。

アルコールの種類で見ると、火酒の消費は1887年の課税強化後に1870年頃のピーク時の半分にまで急速に減少する一方で、ビールの消費は19世紀末にかけて増加の一途をたどり、1900年の一人当たりの年間ビール消費量は1870年の2倍となった後にわずかの減少した。「実質賃金の増大により、多くの労働者において、安いシュナップスから社会的により高級なビールへの移行が明らかに可能となった²⁵⁾」のである。この「ビール消費の増大＝シュナップス消費の減少」は単に消費されるアルコールの変化にとどまらず、労働者の飲酒行動自体の変化も促すことになった。19世紀を通じて一般的であった「手段的飲酒」は「社会的飲酒」へと変化し²⁶⁾、その中でアルコール（ビール）は嗜好品となっていった。「ビールは人気の飲料としてシュナップスに追いついたが、ビー

ル自身もますます別の形で消費された。アルコール消費はもはや自己目的ではなく、他の多様な活動に付随していた。世紀転換期頃には、アルコールはもはや栄養剤ではなかった。それは嗜好品 *Genußmittel* になった²⁷⁾。こうした変化を同時代の社会民主党員の医師で社会衛生学者の A・グロートヤーンはアルコール中毒の減少の点から高く評価している。

「常にビールを飲む者は、たとえ生理的に許される基準をかなり越えたとしても、火酒を飲む者ほどにはアルコール中毒になることはほとんどない。…それゆえ、医者立場からは、ますます多くの労働者が安価だが危険なシュナップスから、高価だが本質的には害のないビールへの移行を実行するのであれば、一つの大きな進歩とみなされなければならない²⁸⁾」。

(2) 「アルコール問題」

第二帝政下のドイツにおける労働者家計においてアルコールへの支出はどれくらいだったのであろうか。他の社会集団との比較において、労働者のアルコール支出の割合は高かった。1909年における公務員世帯の平均年間ビール消費量が171.2リットルであったのに対して、労働者世帯のそれは272.1リットルであり、そこからロバーツは「労働者階級の消費選択ヒエラルヒーの中でアルコール飲料に割り当てられた優先順位の高さ」を指摘している²⁹⁾。「労働者階級のアルコールへの支出は概してきわめて控えめだった。にもかかわらず、労働者は…他の社会集団よりも、絶対的にも相対的にもアルコールに対して多くを出費していた³⁰⁾」。それでも、20世紀初頭に行われたいくつかの社会調査から判明する労働者家計に占めるアルコール支出の割合は4.8%~6.7%であり、「稼ぎの多くを酒に費やす」というイメージの労働者像からはかけ離れていた。

こうした労働者の「控えめ」なアルコール支出にもかかわらず、「稼ぎの多くを酒に費やす労働者」像は19世紀後半のドイツでは広く共有されていた。そのイメージは、貧困や劣悪な労働状況や住環境に苦しむ労働者が現実逃避のために過度に飲酒するというものであり、ブルジョア的な生活態度（節酒・禁酒）から労働者の生活規律の欠如を批判し、その改善を求める「ブルジョアの貧困理論³¹⁾」がその根底にはあった。こうした労働者の「飲酒癖（アルコール依存）*Alkoholismus*」はステレオタイプ化され、そこから労働者の飲酒癖を社会問題（＝「アルコール問題」）とする見方が生まれることになった。労働者のアルコール依存問題は貧困や犯罪の問題とも容易に結合して、とりわけ1880年代のドイツ社会で大きな反響を巻き起こしたのである³²⁾。

先述のように、都市部での労働者層の人口増大はアルコール消費を拡大させ、1870年代にそのピークを迎えることになったが、それと並行して禁酒や節制に対する社会的関心も高まり、ドイツでも禁酒運動が展開することになった。すでに職場での飲酒癖が問題となり始めた1830年代には「アルコールの完全な放棄を要求する最初の禁酒運動³³⁾」が成立したとされるが、その本格的なものは1880年代になって主として中産階級のプロテスタントを中心に行われるようになった。1883年には「ドイツ反アルコール濫用協会 *Deutscher Verein gegen den Mißbrauch geistiger Getränke*」が設立され、その会員数は1897年の11348名から1912年には40232名へと増大していった³⁴⁾。1899年の総会では、同協会は「驚愕すべき社会現象」である飲酒癖への対抗手段として国民教育の必要性を訴えている。

「酒場生活がきわめて拡大しているところでは、非常に粗野で有害な大衆娯楽が見出される。しかし、よりよき国民教育やその結果として自らの生活に実質と形を与えることができる大衆の能力の向上が現われるところでは、娯楽はより品の良いものとなり、家族生活はより幸福で好ましい形となり、飲酒癖 *Trunksucht* や酒場生活は減少し、そしてその有害な影響は極めて強力な形で抹殺される。…しかし同時に必要なのは、新しい生活の娯楽がすべて開かれている若者たちに対して、大人たちと同じように、常に酒場とは異なるのやり方でも休息を取る可能性が提供されることである。…国民教育の上昇なくして、酒場生活や飲酒癖に別の方法では効果的に立ち向かうことなどできない³⁵⁾」。

(3) 酒場の発展

こうした労働者とアルコールの関係（飲酒癖）を問題視する動きの一方で、19世紀後半のドイツでは都市部において酒場が急増し、酒場を中心とした「文化」が形成されていくことになった。労働者層あるいは社会主義運動と酒場の関係は次節において詳述するため、ここでは19世紀後半から20世紀にかけてのドイツにおける酒場の発展を概観するとどめたい。

19世紀の工業化はそれに伴う工業労働力の流入は大都市化の進展を促した。ドイツ帝国成立時の1871年に47万人余りだったベルリンの人口は、1900年には163万8千人、さらに1910年には231万人と40年足らずで5倍近くに

急増した。この人口急増の中心は都市労働者であり、この層が「酒場制度の量的に急激な発展の基盤³⁶⁾」となった。「この移住運動から都市の人口集中が生じ、その後、酒場 *Kneipe* の大流行がもたらされることになった³⁷⁾」。ロバーツは19世紀を通じて酒場が急増した要因として、都市の成長、旅行者の増加、大衆の購買力の向上、酒場営業の自由化を挙げているが、とりわけ1869年の酒場営業許可の自由化を挟む1850年代から1879年にかけての時期が酒場・飲食店が恒常的に増大した時期と指摘している³⁸⁾。実際、プロイセンにおける人口1000人当たりの営業権を持つ酒場の数は1852年の2.5軒から、1869年に3.7軒、1872年には4.8軒と増加した³⁹⁾。ドイツ全体でみると、1879年に帝国営業令 *Reichsgewerbeordnung* の改訂により営業権の付与が制限されて以降、酒場数は微減しているが⁴⁰⁾、それでもベルリンなど大都市部では世紀転換期にかけて酒場はさらに定着していった。「世紀転換期頃、ベルリンの都市光景は酒場 *Kneipe* によって刻印されていた⁴¹⁾」。ベルリンでは1900年頃に人口1000人に対して7.4軒の酒場や飲食店が存在しており、中心部のフリードリヒ通りでは19世紀末に家屋番号よりも酒場数が多かったと言われる⁴²⁾。「ベルリンでは1905年には土地区画1つおきに1軒の酒場 *Gaststätte*、ベルリンでの表現では *Kneipe* があった。…*Kneipe* や *Gaststätte* は市の中心部や労働者地区に集中し、そこではほとんどすべての建物に *Kneipe* があるか、もしくはフリードリヒ通りのようにしばしば一つの建物のさまざまな階に複数の *Gaststätte* が入っていた⁴³⁾」。ベルリンなど大都市では「酒場は、街の中の、特に往来の激しいところの利用可能なすべての通りの角を占有していた⁴⁴⁾」のである。

とりわけ19世紀後半の大都市において発展した近代的な酒場はもちろん一様な性格を持つものではなく、極めて多様であった。ロバーツはこの「酒場」の多様性の背景として客層、地域性、規模、雰囲気などを挙げ、「特定の酒場の性格は社会的特徴や客の構成に依存していた」と指摘している⁴⁵⁾。都市に立地する酒場を客の階層によって分類した場合、ブルジョアの名望家が入り出す酒場の他に、19世紀後半には労働者地区内の労働者酒場 *Arbeiterkneipe*、世紀転換期にはビジネス街に立地するサラリーマン酒場 *Angestelltenkneipe* が登場した⁴⁶⁾。さらに労働者酒場には、労働者が日常生活の一部として出入りして飲酒や社交を行う居酒屋と、売春・犯罪・非合法行為が行われる「いかがわしい酒場」(犯罪者地下酒場 *Verbrecherkellner* やキャバレー *Animierkneipe*) があった。労働者酒場は客層の常連性(常連酒場 *Stammkneipe*)や街角での立地(街角酒場 *Eckkneipe*)という特徴をもち、19世紀最後の20年の間には社会主義労働運動と接点を持つようになっていった(図1・2参照)。「19世紀の最後の四半世紀に、カウツキーが1890年に自立的な労働者文化の中心的要素とみなした古典的労働者酒場が成立した⁴⁷⁾」。この「古典的労働者酒場=社会主義的労働者酒場」は、19世紀後半、とくに社会主義鎮圧法時代の労働



【図1】ベルリン・ノイケルンの酒場(ロイター通りとカイザー・フリードリヒ通りの角) [1895年頃]

Landesarchiv Berlin, F Rep.290 (03), Nr.0277413



〔図2〕ベルリン・フリードリヒスハインの酒場（ゴスラー通りとペディカー通りの角）〔1910年頃〕

Landesarchiv Berlin, F Rep.290 (03), Nr.0316804

運動の拠点としての役割を果たすようになり、労働者たちの政治生活に欠くことのできない場所となっていった。「都市の工業労働者層にとって、そして数多くの手工業者や小商人にとっても、酒場 Kneipe はプロレタリア的な生活態度の中心的な場所となった。というのも、そこに彼らは人づきあいや同じ考えを持つ者の共同体の中での政治的意見交換の可能性を見いだしたからである。…1878年以後、社会主義者鎮圧法の下で屋外での集会禁止が実行されると、労働者酒場は政治文化の中心的な場所となった。ここでは労働運動の理念を議論し、拡大することができた⁽⁴⁸⁾」。以下では、労働運動と酒場の関係に焦点を当て、政治的な場所としての酒場の側面を明らかにしていくことにしたい。

2. 社会主義労働運動と酒場

(1) アルコール批判

19世紀の社会主義労働運動内では、飲酒を批判し、その放棄を目指す動きと、逆にそれを擁護する動きが混在していた。前者に関しては、すでに19世紀の前半より労働者の行き過ぎた飲酒行為（飲酒癖）が労働者の置かれた悲惨な社会状況（貧困）と関連づけられて批判の対象とされてきた。ロバーツによると、労働者の「アルコール問題」に対する批判は、労働者自身の墮落的な生活に原因を求める「道徳的立場」と、飲酒癖を資本主義社会の悲惨な社会・経済状況への不可避的な反応とみなす「環境決定論的立場」に分かれていた⁽⁴⁹⁾。ブルジョアの禁酒運動も社会主義労働運動も「貧困」と「飲酒癖」を結びつける点では一致していたが、前者が労働者自身の生活規律や生活態度を批判し、「貧困」「飲酒癖」「犯罪」を一体化させて反アルコール運動の論拠としたのに対して、後者は明らかに飲酒癖の先に資本主義社会の必然的矛盾（搾取と疎外）を見て、アルコール批判を資本主義批判へと転化させていた⁽⁵⁰⁾。

社会主義労働運動内での「アルコール批判＝資本主義批判」の典型の一つがF・エンゲルスによるものである。少し長いが、彼の記述を引用してみよう。

「さらになお、多数の労働者の健康を衰弱させる別の影響がこれに加わる。とりわけ飲酒。あらゆる魅惑、ありとあらゆる誘惑があわさって、労働者を飲酒癖へとみちびく。…労働者はつかれきって仕事からわが家に帰ってくる。一片の住みやすさもなく、多湿・不快・不潔な住居に、である。どうしても気晴らしをしたくなる。仕事を骨おりがいのあるものとし、つらいあすへの思いを耐えうるものとしてくれるなにかをもたなければならない。不健康な状態、ことに消化不良だけからでも生じる、沈んだ、不愉快な、鬱屈した気分は、その他の生活状態のために、生活が不安定であるために、ありとあらゆる偶然に左右され、

自分たちの状態を安定させるためにほんの少しのことさえ自分ではできないために、ついには耐えられないものとなる。悪い空気と粗悪な食物によって衰弱した労働者の体は、どうしても外からの刺激を必要とする。社交的欲望はただ酒場でしか満たされない。友だちと会えそうな場所はほかにはない。それにもかかわらず、労働者は酒におぼれたいという激しい欲求癖をもってはならないし、飲酒の誘惑に打ち勝たなければならないのであろうか。その反対にこのような事情のもとでは、圧倒的多数の労働者が飲酒におちいらざるをえない精神的・肉体的必然性がある。…飲酒癖が飲んでいる本人に責任を負わせることのできる悪徳ではなくなっている。飲酒癖は一つの現象となる。つまり一定の条件が、少なくともこの条件にたいしては自由意志をもたない一つの物体〔労働者〕をもたらず、必然的で不可避の結果となるのである。労働者をたんなる物体とした者が責任を負うのがよい。しかし多数の労働者が飲酒におちいるのと同じ必然性、これと同じ必然性で、飲酒はその犠牲者の精神と身体とに破壊的な作用をおよぼす。労働者の生活状況から発生するあらゆる病因は飲酒によって促進される⁵¹⁾。

エンゲルスは労働者のアルコールの過剰摂取（飲酒癖）の背景に、長時間の過酷な労働、不十分な栄養摂取、悲惨な住居環境を見ていた。貧困や疎外と労働者の飲酒癖を結び付ける考え方、ヘッゲンの言葉を借りれば「ステレオタイプな貧困労働者像」としての「貧窮的飲酒癖 Elendsalkoholismus」（生活の苦しさや不安を忘れるための飲酒）は、エンゲルスのみならず、同時代の社会主義運動内、さらにマルクス主義者以外でも広く共有されていた⁵²⁾。前出の社会民主党員の医師グロートヤーンも飲酒癖の原因を労働者の置かれた社会環境の「本質的な影響」に求め、以下のように述べていた。

「社会的ミリューがアルコール摂取に対する一般的な傾向を高めている住民層は住民全体の極めて大きな部分を成しているのので、節度あるアルコール摂取から無節制のアルコール摂取へと引っ張られていくこの階層の個人数も厳密に言って極めて大きい。…実際、もっぱら精神病的性質により過剰な飲酒へと追いやられる者、あるいはアルコール産業で働く結果、誘惑に屈する者、あるいは上層や中層の飲酒道徳により飲酒癖に陥ってしまう者は、数的に見ると、労働者階級の列から社会的貧困の圧迫の下で飲酒に走る者の背後にはっきりと隠れてしまっている⁵³⁾。

既述のように、ブルジョア禁酒運動が1880年代に本格化し始めたのに対して、ドイツの社会主義労働運動内での禁酒・反アルコールの動きは20世紀初頭になって現れるようになった。1899年にパリで開かれた第7回反アルコール大会では、ベルギーの社会主義者E・ヴァンデヴェルデが次のようにアルコール撲滅を訴えている。「しらふの労働者だけが未来志向の階級闘争意識を発展させることができるのであり、禁酒および節酒運動に積極的に参加することがヨーロッパ労働運動の本質的任務である⁵⁴⁾。こうした認識はドイツ社会民主党（SPD）にも持ち込まれ、世紀転換期には社会主義労働運動内でも禁酒が議論され始めた。1903年にはブレーメンで「ドイツ労働者禁酒同盟 Deutscher Arbeiter-Abstinenten-Bund (DAAB)」が結成されたが⁵⁵⁾、同組織は1907年に目標として以下のことを掲げていた。

「ドイツ労働者運動を今日なおも労働者階級ののしかかるアルコール摂取から解放すること、それによりこの運動を有能で闘争に長けたものにする、ますます決定的に資本主義的階級国家に対する闘争を行う能力をこの運動にもたらすこと、これがわれわれの目標である⁵⁶⁾。

これによると、DAABは資本主義に対する階級闘争からアルコールの影響を除去することを目指しており、実際、DAABの活動もあってSPDのエッセン党大会（1907年）やライプツィヒ党大会（1909年）では飲酒問題が取り上げられている⁵⁷⁾。しかし、その影響力は限定的であった。「1907年までに、DAABはSPD党大会の議題に“飲酒問題”のための場所を確保することに成功したが、DAABは労働運動内で孤立した少数派のままであり、党の基本的に守勢的な立場を変えることはできなかった⁵⁸⁾。

総じてみると、社会民主党や労働運動の反アルコール・飲酒癖撲滅への動きはそれほど活発なものではなく、その主張は完全な禁酒よりもむしろ「節制」であった⁵⁹⁾。「社会主義的政策の前提条件としてのアルコールの完全放棄に対する要求は労働者階級の圧倒的多数によって拒否された⁶⁰⁾」のである。そもそも、労働者の飲酒癖の原因が社会体制が引き起こす貧困、つまり資本主義自体に内在するのであれば、資本主義を打倒することがこの問題の最善の解決策ということになり、「アルコール問題」それ自体に関心が向けられることはなかった⁶¹⁾。さらに、アルコールや酒場が日常生活の一部となっていたドイツ労働者層において、アルコール自体を撲滅することは現実的な対応ではなかった。「大衆的なアルコール消費の形は明らかに労働者階級内では幅広く多様であったが、ほとんどの労働者がアルコール飲料を彼らの生活水準の不可欠な部分とみなしていたことは疑いなかった。それは抑制されるものではなく、むしろ保護されるべきものであった⁶²⁾」。この意味で、「ドイツの労働者に

関する限り、飲酒問題など存在していなかった⁶³⁾」のであり、労働運動の禁酒問題への取り組みはそれほど活発なものにはならなかった。

(2) カウツキーの酒場擁護論

社会民主党内にあった禁酒や反アルコールの動きに対して、内部で真っ向からの反論を行ったのがK・カウツキーであった。社会主義者鎮圧法下の非合法活動が終わった1890年から翌年にかけて、彼は自らが編集する社会民主党の理論的機関紙『新時代 Die Neue Zeit』に「飲酒癖とその克服」と題する論文を4度にわたって寄稿している⁶⁴⁾。この論文での彼の主張は世紀転換期の社会民主党内でのアルコールをめぐる議論に大きな影響を与え、「党内多数派の見解を表現⁶⁵⁾」するものとなった。以下、彼の主張を確認していくことにしよう。

アルコール問題を論じるにあたって、カウツキーはアルコールそのものを否定していない。彼が批判の対象とするのは火酒（シュナップス）の及ぼす影響である。彼は火酒を「敵」とみなして、ビールやワインの消費地よりも「アルコール中毒患者数が多く見られるのは、火酒が支配的な地域である」と断言した⁶⁶⁾。「絶望や飢餓を和らげ、苦痛から解放する」ためのアルコールとしては「ゆっくりした弱い効果のワインやビールよりも急速に効果が出る火酒がピッタリであった⁶⁷⁾」。アルコール度が高く、カウツキーによると飲酒癖を著しく助長する火酒が民衆に浸透したきっかけは、三十年戦争、七年戦争、ナポレオン戦争といった「大戦争」での兵士への支給であったという。これに対して、カウツキーが火酒の代わりに強く勧めるのがビールであった。「ビールは徐々に国民に火酒の摂取を止めさせ、この方法で飲酒癖の重大な帰結を阻止する⁶⁸⁾」。

火酒の浸透と並んで、カウツキーは、先に引用したエンゲルスの文章を引きあいに出しつつ飲酒癖（過度のアルコール摂取）の原因に資本主義の存在を挙げている。

「（アルコールに対する）“節度のなさ”が増大したのは、人間の生まれつきの性格的弱さや自堕落の結果ではない。人間はそもそも節度を持つことができないからではなく、人間が特定の条件下で、つまり近代的な生産様式が途方もない規模で生み出す条件下で節度がない状態へと追いやられるからである。アルコール飲料を味わうことが常に堕落の根源であるわけではなかった。かつて、それは楽しい社交の源であり、余暇の喜びを高める手段であった。資本主義がこの源泉をますます有毒なものにしたのである⁶⁹⁾」。

従って、カウツキーはアルコールそのものの撲滅を目指す禁酒運動の誤謬を指摘し、これにはっきりと反対する姿勢を示している。その際、彼は禁酒運動が社会民主党内にも広がりつつあることを認めている。

「しばらく前から、ドイツやスイスではイギリスやアメリカのモデルに従って禁酒運動を起こそうとする試みが行われている。それは、例えば節制を促進することではなく、大衆に禁酒、つまりすべてのアルコール飲料を、その軽いものであっても、完全に放棄させることを課題とする運動である。この運動をわれわれの党に持ち込もうとする試みも行われている。完全に禁酒した、しらふのプロレタリアートだけが自らの歴史的任務を果たすことができるという点をもって、わが党が表面上はその成果に特別な関心を示しているといわれている。禁酒の勝利は社会民主主義の勝利の前提条件とみなされてきた⁷⁰⁾」。

しかし、カウツキーは禁酒運動自体を社会主義運動にとって有害なもの、「プロレタリアートとブルジョアジーの間を架橋し、階級闘争を弱める」ものとして非難する。

「われわれが社会主義的な禁酒運動を手にすることがあれば、われわれの中心に禁酒の狂信者も生まれることになる。その狂信者は、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの階級闘争に、それがあらゆるアルコールの享受に反対するという条件の下でのみ参加し、もしプロレタリアートがビールに固執すれば、プロレタリアートに対抗するのである。イギリスやアメリカで禁酒運動が強力なところでは、政治的堕落が引き起こされてきた。禁酒主義者はその階級利害、政治的信念を代表する候補者ではなく、アルコール飲料を全く飲まず、酒場店主の人生を惨めなものにすることを約束するものを選ぶのである。禁酒運動の虜になった労働者は、唇をビールで潤すことを罪だと思わない同志よりも、もしその者が水だけを飲むのであれば、自らの最大の敵を喜んで選ぶのである⁷¹⁾」。

その上で、カウツキーは禁酒運動を無神論者に準えながら、それが労働運動の団結を分断する要素になることに危惧を示している。

「真の無神論者はカトリックやプロテスタントのプロレタリアをあざけり見下す。それに対して、彼は無神論的なブルジョアには大きな敬意を抱く。たとえこの者が最大の搾取者、つまりプロレタリア運動の最大の敵であったとしても。それにより、階級闘争は妨害されるのである。…このような運動〔無神論運動〕は階級闘争を妨害し、混乱させるのであり、階級対立の展開を阻止するのである⁷²⁾」。

禁酒運動は「プロレタリアートの解放闘争にとっての危険⁷³⁾」だという認識に立って、カウツキーはアルコールを社会問題の根源とする禁酒運動側の立場を一蹴している。

「とりわけ禁酒主義者の運動はブルジョアジーに非常に歓迎されている。というのも、ブルジョアジーは飲酒癖 *Alkoholismus* のみならず、今日の貧困や悪習の大部分の責任もアルコール摂取になすりつけるからである。大衆貧困、犯罪、精神錯乱の主たる責任について禁酒主義者たちはアルコールの結果へと向かうのである。…犯罪を生み出す社会状況が人を酒浸りにも追いやってしまうことは当然であり、多数の犯罪者が酒に溺れていたことは従って容易に説明できる。だが、すべての酔った犯罪者が酔っ払ったというだけで、そして酔っ払った結果だけで犯罪を犯し、酔っ払ってなかったら犯罪者にはならないと主張するためには、禁酒主義者にならなければならない。…しかし、アルコールの享受が社会的悲惨さの原因というよりもむしろその影響や付随現象であることは、アメリカの酒類製造販売禁止州、つまりアルコール飲料の販売が禁止されている連邦州の観察により示される。禁酒主義者の主張に根拠があるとすれば、これらの州が真の理想郷でなければならないのではないか⁷⁴⁾」。

カウツキーの禁酒運動批判は、闘争の対象が「禁酒するブルジョアジー」から「飲酒するプロレタリアート」へと変わってしまう点に収斂することになる。

「禁酒主義者の行動においては近代的な生産方法の苦境の犠牲者とその主たる責任者へと変わり、この苦境に対する闘争が方向を変えて、搾取者に対する代わりに搾取される者を相手取ることになるのである⁷⁵⁾」。

以上のように、「火酒（シュナップス）」、「資本主義」、「禁酒運動」に対する批判を展開した後、カウツキーは有名な酒場擁護を展開している。

「プロレタリアにとって、そもそもドイツにおいて、アルコールの放棄はあらゆる社交的集まりの放棄を意味している。プロレタリアはサロンを自由に使うことはできず、その友人や同志たちを自分の部屋に迎えることはできない。プロレタリアが彼らと集まりたいと思えば、自分たちに共通に関わる事柄を話したいと思えば、酒場に行かなければならない。ブルジョアジーの政治は酒場なしでやっていけるが、プロレタリアートの政治は少なくともドイツではそうはいかない。…簡単にさし押さえることができないプロレタリアの政治的自由の唯一の牙城が酒場である。禁酒主義者はそれを軽蔑するかもしれないが、以下の事実は変えられない。つまり、今日のドイツの状況下で酒場は、そこで地位の低い国民階級が自由に集まり、その共通の事柄を話し合うことができる唯一の場所であるということである。酒場がなければ、ドイツのプロレタリアに社交的生活のみならず、政治的生活も提供されることはないだろう⁷⁶⁾」。

カウツキーにとって、アルコール（＝ビール）の放棄は社交の放棄であり、酒場の放棄はプロレタリアートの政治的牙城の放棄であった。酒場の存在は社会民主党や労働運動の政治的自由にとっての制度的保証に他ならなかった。この酒場擁護こそ、カウツキーがこの論文の中で主張しようとしていたことであり、第二帝政期の社会主義労働運動にとって酒場がいかに重要な施設となっていたかを示すものである⁷⁷⁾。酒場と密接に結びついた社会主義労働運動の社交は第一次大戦後まで継続されたままであった⁷⁸⁾。「労働運動と SPD は長年にわたり労働者地区内の酒場において主要なアジェーション拠点と感情的な固定場所を持っていたと言っても言い過ぎではない⁷⁹⁾」のであり、この意味で、カウツキーの酒場観は禁酒運動をはるかに凌いで世紀転換期の SPD 内で広がりとして影響を持ち続けることになったのである⁸⁰⁾。

(3) 労働者文化の中心としての酒場

社会主義労働運動と酒場が結び付き、酒場が「労働運動の社会的中心⁸¹⁾」となったきっかけは、社会主義者鎮圧法による労働運動に対する弾圧の強化であった。もっとも酒場は社交や情報交換などの機能ゆえに、それ以前から権力者にとって常に邪魔な存在であり、記録によれば、すでに14世紀初頭のミュンヘンやニュルンベルクでは酒場の営業規制（法定営業時間の設置）が実施されるなど、中世の各都市では当局による酒場の監視や介入・規制が広く行われていた⁸²⁾。19世紀の酒場には「情報提供（雑誌・新聞の閲覧）」や「情報交換」に「集会」の機能も加わった。「この特質ゆえに酒場は当局にとって目の上のたんこぶとなり、営業時間の制限、集会の禁止あるいはアルコール販売の規制によって当局は酒場を統制しようとした⁸³⁾」。また、当局側は官吏をスパイとして送り込むなど酒場を警戒の対象としたが、それは「酒場の会話は国民感情のバロメーターとして権力者に認識され、政治革命的な潜在性が本気で受け取られていた⁸⁴⁾」ためであった。

19世紀後半の労働者酒場の様子については、ロバーツが同時代人の記述を取り上げて、1896年当時のライプツィヒの社会民主党系の酒場（居酒屋イェーガー *Lokal Jäger*）の様子を紹介している⁸⁵⁾。それによると、この居

酒屋は政治活動のために解雇された労働者が経営しており、店内には3枚の絵（SPD 国会議員の肖像や労働者階級の将来を示す絵、1848年の3月革命の犠牲者の絵）が掛けられ、SPDの新聞や小冊子が閲覧に供されていた。また、店主はラサール、マルクス、ベーベル、リープクネヒトの肖像付きのライターやカフスポタンを販売しており、昼には約25名の労働者が食事をとり、夜にはたいてい若者たちが常連となっていた。この事例から、ロバーツは以下のように述べている。「数多くの他の酒場のように、イエーガーの酒場で特徴的だった気のおけない社交と明確な政治的方向性の結びつきは、労働運動の日常の最も重要な姿を示していた。社会民主党系組織の通常の集会はこうした環境の中で行われていた⁸⁶⁾」。

19世紀の酒場が担った政治的な機能の一つが集会場所を提供することであったが、この側面が極めて重要になるのが、先述した社会主義者鎮圧法時代（1878年～1890年）だった。1878年10月19日に帝国議会で成立した「社会民主主義の公安を害するおそれのある試みに対する法律」（社会主義者鎮圧法）はドイツ全土での労働運動の粉砕を目的として全30条から成っていた⁸⁷⁾。同法により、「社会民主主義的、社会主義的、もしくは共産主義的な試みをもって既存の国家・社会秩序の転覆を目的としている団体」が禁止された。その結果、社会主義政党の存続は認められたものの、16万部の定期購読をもっていた社会民主主義系新聞は発禁とされ、12年間の法律適用期間のうちに95の労働組合と23の補助組織、さらに108の政治団体と106の娯楽団体が解散に追い込まれた⁸⁸⁾。

鎮圧法により「社会主義勢力に対する政治的抑圧の時代⁸⁹⁾」を迎えたため、活動の自由を奪われたSPD系組織の労働者たちは、酒場で様々な偽装を凝らして会合や集会を催した。酒場が「組織・議論の中心的な場所⁹⁰⁾」となったのである。「集会場としての酒場は、非合法に活動する労働運動にとって、極めて明確な政治的機能を獲得することになった—それは、ほとんど監視されることなく会合ができる唯一の場所だった⁹¹⁾」。労働者酒場の数は相当数に上ったため、当局側の監視の目は行き届かず、またそこに集まる者は近隣の居住者であったため、当局側が送り込むスパイはすぐに見破られた。「社会主義者鎮圧法の適用範囲は、しばしば酒場のドアの前で終わっていた⁹²⁾」のである。鎮圧法下での酒場の役割については、前出のカウツキーも以下のように述べている。

「社会主義者鎮圧法の下で、労働者のすべての結社は解散され、それにもかかわらず社会民主党は統一的政治的団体として残り続けたが、政治家や検事たちは絶望的な活発さで社会主義的な労働者層全体を束ねる秘密組織を探し求めた。その成果のない捜査において、彼らが見過ごしていたのは、党員たちが訪れるあらゆる酒場が“秘密結社”を形成し、思想や行動における結束を拡大し、個々の同志たちの下でのつながりを維持したことである。もちろん、それは上層部、規約、それどころか特定の会員資格のない秘密結社であった。そこにいて政治的議論に参加する者は、積極的であれ消極的であれ、この解散されられることのない、そして再三にわたって更新された秘密結社のメンバーであった⁹³⁾」。

非合法化されたSPD・社会主義労働運動系の諸組織にとって、地下活動と生き残りには酒場の存在が不可欠であった⁹⁴⁾。特に鎮圧法の下での労働者の政治的集会には酒場の「奥座敷 Hinterzimmer」が重要な役割を果たしていた⁹⁵⁾。「酒場の奥座敷では、労働運動のさまざまな政治的・文化的組織が会合を持った。党細胞であれ労働組合連合 Gewerkschaftskartell であれ、労働者合唱団であれ労働者体操・スポーツ連盟であれ、労働者教育連盟、自然愛好会 Naturfreunde、労働者救護同盟 Arbeitersamartier-Bund であれ、プロレタリア無神論者共同体であれ、すべてが酒場に姿を現わした⁹⁶⁾」。ヒュプナーはドイツの酒場の典型的な構造がカウンター形式ではなくテーブル形式だった点を強調し、そこに飲酒する者たちの対話や社交の可能性を読み取っているが⁹⁷⁾、テーブル席のあるホールのさらに奥の部屋は鎮圧法の時期を越えて会合や読書などを通して労働者の政治意識の形成や教育に重要な役割を果たし、その意味で酒場の奥座敷は「労働者の大学⁹⁸⁾」となったのである。

さらに、酒場がSPD・社会主義労働運動の地下活動の舞台となるためには、店主との協力関係も不可欠であった。「社会民主党にとって酒場は労働運動の政治的、文化的、社会的生活の中心における重要性を保ち続け、それどころか増加させていた。SPDのアルコール自体に対する両義的態度にもかかわらず、酒場は政治的生命線であった。…酒場は他の場所が禁止されていたときには唯一可能な集会場所であった。酒場は伝統的に労働運動にとって不可欠なリクルートの場所であったが、非合法の数年間を通じて、運よく酒場主人の十分な共感と支持を得た地方の党組織は生き残り、繁栄することになった⁹⁹⁾」。もちろん、すべての酒場がSPDとの協力に同意したわけではなく、投獄・罰金・追放あるいは営業許可の取り消しといった鎮圧法による弾圧を恐れた店主の拒否的な態度により政治的集会の場所を見つけることは一定の困難を伴っていた。しかし、固定客を獲得するという意味でSPDとの協力関係は酒場店主の側にもメリットがあり、1880年代のドイツの大都市では、酒場店主と客（労働者）の間に「共生」関係が成立することになった¹⁰⁰⁾。

社会主義労働運動と酒場との結びつきを強化するきっかけとなった鎮圧法は1890年に廃止され、社会民主党の

国会以外での政治活動も再び合法化されることになったが、集会場あるいは労働者の組織・教育活動としての酒場への依存はその後も続くことになった¹⁰¹⁾。これに対して、労働者の飲酒癖問題とも相まって、当局は社会主義運動の温床となっていた酒場を営業許認可の厳格な適用で管理しようと努めた。こうした当局の営業規制に対して、例えば、ルール地方では労働者たちが結社の自由に基づいて、営業許可が不要な協同組合形式の「シュナップスカジノ Schnapskasino」と呼ばれる酒場を1880年代末から1890年代前半にかけて立ち上げている¹⁰²⁾。1894年にはルール地方で110軒に16640名の組合員を記録したこの酒場は「プロレタリアの社交と政治活動の密接な結びつき¹⁰³⁾」を保証する一方、ルール地方に根づいていた飲酒を不可欠の要素とする労働者文化の発現形態でもあった。「それ（シュナップスカジノ）は社会民主党員たちに集合場所を提供した。それは社会主義者鎮圧法の廃止後もなお彼らを警察の監視から守っていた。だが、ほとんどの労働者の日常生活の中で、シュナップスカジノは、飲酒と酒場を伴う都市的で男性によって作り出された労働者文化の不可欠な要素であった¹⁰⁴⁾」。

こうした労働運動と酒場の関係は、鎮圧法による地下活動が終わった後にはその限界も示すことになった。グロショップはこの点について以下のように指摘している。「結局のところ、政治的組織は酒場での社交やビール酒場と結びついたままではいられなかった。たとえ会議が奥座敷で行われていたとしても、政治的議論は文字どおり酒場の騒音の中で窒息した。…資金や組織資料を奥座敷の中や店主の下でしっかりと保管することなどできなかった。客や給仕たちがひっきりなしに出入りするところで、多数の専任・名誉職の幹部たちの真剣な活動など考えられなかった¹⁰⁵⁾」。また、ロバーツは労働運動が独自の酒場へと閉じこもっていくことで「労働運動のカプセル化」が促進された点を指摘している。「酒場は組織労働者の関連する分野を社会的観点では拡大することができたが、政治的観点では狭めてしまった¹⁰⁶⁾」。この意味では、酒場での政治的活動が政党・労働組合組織に本質的に貢献したかどうかは議論の分かれるところである¹⁰⁷⁾。

しかし、他方で労働運動と酒場の「共生」関係は鎮圧法時代に確立した後も第二帝政期を通じて存続し、酒場に行くことは同時に政治活動を示すようになっていった。「酒場はもはや労働者が政治的信念から切り離されて交流する場所ではなく、特定の酒場を訪れる決断は常に党派性を示すことにもなった¹⁰⁸⁾」。労働者の立場から見た場合、酒場は自分たちの文化的象徴であると同時に、政治の場でもあり、そこには後に述べるように、平等で対等な社交が存在していた。「酒場は、労働者が日常的に対等の立場で互いに交流する数少ない場所の一つだった。この相互の直接的・個人的交わりの網状の関係の中で常に新たに生み出されたのが、労働者階級の政治の日常的現実だった¹⁰⁹⁾」。従って、カウツキー論文以降、SPDの指導者たちは酒場、ひいてはアルコール（ビール）に対する攻撃に同調するのではなく、むしろそれに対抗する必要に迫られていくことになるのである。ヒュプナーが指摘するように、SPDの活動や労働者の文化にとって酒場がもつ価値は「計り知れない」ものであり、SPD自身もまたそれを自覚していたからであった¹¹⁰⁾。

3. 政治的公共圏としての酒場

(1) 酒場における社交・コミュニケーション

「酒場は全く一般的には、社会的行動の場と定義づけられるが、それは社交の一形態によって特徴づけられ、その明白なメルクマールは、多かれ少なかれ互いによく知った者たちが原理的には誰にでも解放された空間と一緒にとどまること、共通の飲食、そして言うまでもなく共通のコミュニケーションである¹¹¹⁾」。シュタルツインガーのこの指摘に示されるように、19世紀のドイツにおいて、酒場は飲酒そのものを目的とする施設というよりも、そこに集まった者たちのアルコール摂取を通じての社交やコミュニケーションの場として機能していた。「ドイツでは、アルコールを飲まないおしゃべり、会合、取引契約を思い描くことなど全くもってありえな¹¹²⁾」だったのである。

とりわけ19世紀後半の労働者にとって、酒場は重要なコミュニケーション空間としての役割を果たすことになった。「個人的な語り、情報提供とコミュニケーション、社会的接触のあらゆる形での交流、酒場内で行われる社交はプロレタリアの日常の重要な側面である¹¹³⁾」。この時期に飲酒の本来の形態であった「手段的飲酒」や「麻酔的飲酒」よりも酒場での「社会的飲酒」が「労働者の生活の重要な部分」となり、「酒場と労働者の社交生活の相互依存」が生まれた¹¹⁴⁾。そうした中で、アルコールの存在は酒場に行く目的としては副次的なものになっていったのである¹¹⁵⁾。

19世紀後半における労働者酒場の成立は、労働者にとっての酒場が自分たちと他の世界を分け隔てる存在であったことの現れであった。酒場を「文化的に刻印されたマイクロコスモス¹¹⁶⁾」と捉えるギールによると、酒場での

行為（飲酒や社交・コミュニケーション）はコード化・規格化されており、飲酒行為、飲酒場所（酒場）、コミュニケーションの方法は文化的拘束の下にあるという。「酒場での飲酒やそれをコミュニケーション的に取り巻く行動は、はっきりと定式化・制度化されている。誰が誰と何を飲むかは単なる偶然以上のものである。飲酒もまた酒場の訪問者を切り離したり結びつけたりするが、その際、彼らは通用している規則、動機、価値観、慣習、そして社会的統制を受けることになる¹¹⁷⁾」。コード化・規格化された酒場空間での飲酒行為は、具体層のレベルでは、常連客の間の挨拶、話し方、注文方法（合図の仕方）、酒のつぎ方、乾杯の儀礼、飲み干し方、休憩の挿入、支払いや別れ方に現れており、それは酒場という空間に存在する視覚的なもの（特殊な記号やシンボル）や聴覚的なもの（さまざまな音響）を包括的に含んでいた¹¹⁸⁾。ギールは酒場で行われる対話は「大部分において集合的なコンセンサスに依存している」とした上で、次のように指摘している¹¹⁹⁾。「安定し、自然発生的で、開かれた接触の状況での社交や対話への欲求は、酒場生活の重要な動機を明確に規定している」。

こうしたコードや規格を通じて、19世紀後半の酒場は社会的、階層のあるいは職業的に差異化されていき、「社会的に比較的同質の内的ミリューを持つ近代的な酒場¹²⁰⁾」あるいは「社会構造的な変動幅が比較的少ない酒場¹²¹⁾」が成立することとなった。もちろん酒場をその一部とする労働者の文化的ミリューが成立するには19世紀の工業化や都市化の結果としての労働者居住地区の成立と主観的な階級意識の形成が不可欠であり、この空間的・意識的な前提を基にして酒場の社会的同質化は進んでいった¹²²⁾。「たとえ以前から酒場が解放された空間であったとしても、常に多かれ少なかれはっきりと示された「入場制限」は存在しており、それは通常、特定の社会集団への所属に関連していた¹²³⁾」。原理的には万人がアクセス可能な施設であっても、実際のところ酒場には「目に見えない垣根¹²⁴⁾」が存在していたのであって、労働者はその政治的な活動を通じて酒場の中に、あるいは酒場を中心として、階級的に限定された自らの公共圏を形成していくことになるのである。

(2) 「酒場＝プロレタリア公共圏」の形成

酒場を政治的に機能する公共圏とみなし、そこに政治的公共性の存在を指摘する立場はこれまでもいくつかの文献で繰り返されてきたが、こうした公共性（圏）に関する議論が下敷きにしているのがJ・ハーバーマスの市民的公共性論である¹²⁵⁾。

ハーバーマスによると、「政治的（に機能する）公共性」とは、政治的意思決定に影響力を及ぼす公論が形成される社会的関係を指し、それが展開される領域（空間）は「政治的公共圏」と呼ばれる。構造的に見れば、その議論は国家（公権力の領域＝公圏）と社会（私的な民間の領域＝私圏）の分離を前提としており、後者の中に私生活圏（商品交易・社会的労働の圏と小家族的親密圏）と並んで想定されるのが公共圏である。「市民的公共性のモデルは、公的領域と私的領域のきびしい分離を基準にしており、そのさい、公衆として集合した私人たちの公共性は、国家を社会の要請と媒介しながらも、それ自身は私的（民間）領域に属していた¹²⁶⁾」。資本主義の発達に伴い経済活動を拡大した私人たちは政府による規制を批判し、それに対抗すべく、「公衆＝市民」による理性的討議を通じて形成された、権力を議論の対象とする合理的な公共的意見としての「公論」の前に公権力を引き出し、それを批判・制御するシステムを築いたとされる。この意味で、公共圏とは「公衆として集合した私人たちの生活圏¹²⁷⁾」であり、私的領域としての公共圏は「国家と社会の間の緊張」関係の中で「公論」を通して社会の要請を政府に媒介し、公権力を絶えず監査の下に置くものとされる。「公権力の公共性が私人たちの政治的論議的的になり、それが結局は公権力から全く奪取されるようになる¹²⁸⁾」のである。

歴史的に見た場合、市民的公共性の成立は中世の代表具現的公共性からの転換を契機とし、都市のカフェやコーヒーハウス、あるいはサロンに集った新興ブルジョア層による文芸的公共性（芸術批評や読書）をその源にしていた。その議論の対象は当初の文芸的なものから政治的なものへと変化していき、政治的監査機能や権力への制御機能を獲得していくようになったとされる。17世紀半ばまでさかのぼるカフェやコーヒーハウスは、まずヴェネツィア、ロンドン、マルセイユ、ハンブルクなどの港湾都市に登場した¹²⁹⁾。それは市民的公共性の最初の発現形態であり、「批判的公共性の発展のためのコミュニケーションセンターとして役立った¹³⁰⁾」。そこでは雑誌や新聞・ビラが自由に閲覧され、情報が交換され、さらには芸術や政治・経済・社会問題について議論が行われた。

こうした市民的公共性は17世紀後半のイギリスや18世紀のフランスを起点とし、ドイツでは18世紀末になってようやく形成され¹³¹⁾、「万人への開放性」、「参加者の対等性」、「討議の批判性」をその特徴としていた。「民間人は私人である。したがって彼らは「支配」しない。それゆえ、彼らが公権力に対してつきつける権利要求は、集中しすぎた支配権を「分割」せよというのではなく、むしろ既存の支配原理を掘り崩そうとするのである。市民的公衆がこの支配原理に対置する監査の原理が、まさに公開性なのであって、これはもともと支配そのものの性

格を変化させようとするものなのである¹³²⁾。このように万人の参加可能性を成立条件とするハーバーマスの政治的公共性であるが、その公共性の実際的な担い手とは、経済的に自立し、「教養と財産」をもつ市民層（市民的な読書公衆）であった。「教養がひとつの入場基準であり、財産がもうひとつの入場基準である。事実上は、この二つの基準は大幅には同一の人員範囲に適用される。というのは学校教育は当時、特定の社会的地位につくための前提条件というよりも、むしろ社会的地位の帰結であり、そしてこの地位は主として財産を基準にして定められていたからである。教育ある身分とは、とりもおさず、資産ある身分である¹³³⁾」。従って、ハーバーマスにおいては、政治的公共性それ自体が「市民的公共性（公共性の自由主義的モデル）」に等置されることになり、民主主義的・自由主義的な価値規範を含む唯一の公共性モデルとみなされている。

政治的公共圏が「市民」の討議空間として成立した結果、財産や教養のない者、例えば労働者は公共圏の構成者から排除されてしまうことになった¹³⁴⁾。だが、「公共性」を議論を通じて「公論」を形成する社会的関係、「公共圏」をそうした行為がなされる場と捉えるならば、19世紀後半に政治的に台頭してきた労働者たちもまた「酒場」での議論や情報交換を通じて自らの政治的意見を形成していたということになる。「公共圏」としての酒場に関して、ドレーゲとクレマー＝バドニーは以下のように指摘している。「酒場は…原理的には公共圏の施設である。すなわち、そこには法的には誰でもアクセスでき、基本的には人種、宗教、性別を理由に酒場に立ち入ることを誰も妨げられてはならない¹³⁵⁾」。「酒場は、プロパガンダ的・組織的関連を伴って機能する政治的公共性の空間である。それは…階級特殊的に、政治状況の中で権力政治的な防衛闘争の中にいるはっきりと定義された社会的担い手の主観に限定される。…従って、酒場はどちらかと言えば17・18世紀のコーヒーハウスの公共性機能に似ている¹³⁶⁾」。こうした指摘に、同時代人グロートヤーンの言葉を重ねても不当ではないだろう。

「酒場は国民大衆の政治的な活動の出発点をなしており、しかもその程度は、政治的な生活が民主主義的形態の傾向を持つにつれて、ますます上昇している。…特にドイツでは、まさに公式の場所や公式の機会には行われぬあらゆる政治がおびただしいアルコールの消費の下で行われている。…非強制的な団体におけるビアテーブルでのこうした政治は、ドイツではまさにわれわれの公共的な生活の統合的な部分だと理解することができよう¹³⁷⁾」。

ハーバーマスによると、大衆民主主義化や資本の集中・独占化、権力の中央集権化の過程の中で、政治的諸問題の解決が公権力のレベルへ移行されると、国家による私的領域への干渉がはじまり、公圏と私圏の「交錯」が生じる。この国家と社会の相互浸透の結果として成立する「再政治化された社会圏」では、もはや市民的公共性の成立条件たる公圏と私圏の明確な分離は消滅し、市民的公共性（圏）の自律性は失われていくことになった。政治参加機会（選挙権）の拡張、社会保障や生活補助などの公的サービスの拡充、テレビ・ラジオ・映画などのマス・メディアの成長、レジャーの大衆化などに特徴づけられる19世紀後半以降の福祉・社会国家と大衆民主主義の時代の到来は、ハーバーマスにとっては市民的公共性の「基本図式の消滅」であった。

酒場を舞台としたプロレタリア的な公共圏は、ハーバーマスの言う19世紀後半の市民的公共性の解体過程の中で形成され、ヘゲモニーを握った市民的公共圏に対する対抗公共圏としての性格を持っていた。「啓蒙絶対主義の時代には、ブルジョア的常連客が宮廷公共圏に対する対抗公共圏である。ブルジョア社会においては、酒場公共圏がプロレタリア的な対抗公共圏となる。そこからさらに読み取りうるのは、ブルジョアによる権力要求の定着とともに、開かれた公共圏への要求は消え去ってしまうということである。というのも、三月前期においてなおも政治的だったコーヒーハウス公共圏は、ブルジョア層が立法に関与し、その政治的利害を表現すべくブルジョア的メディア公共圏の効率的かつ支配的なシステムが利用可能になると、すぐにブルジョア的常連客と同じくその政治的機能を失ったからである。ブルジョア階級が“公共圏”を自らの意図のために道具化したので、プロレタリア階級はこの可能性を利用できず、酒場の中にその対抗公共圏を創出したのである¹³⁸⁾」。このように、ベネダーは市民的公共圏の開放性の喪失の中に対抗作用としての酒場でのプロレタリア公共圏の成立を見ている。ブルジョアにとっての市民的公共圏がそうであったように、「酒場公共圏 *Gasthausöffentlichkeit/Kneipenöffentlichkeit*」は労働者にとっての討議空間であった¹³⁹⁾。同時に、この公共圏は情報交換や出版物閲覧の場であり、労働者の社交と社会的結合の場、「労働者が日常的に対等の立場で互いに交流する数少ない場所の一つ¹⁴⁰⁾」でもあった。そこでの対等な立場での社交と網目状の人間関係の中で、労働者は自らの政治的意識を形成し、さらに労働者たちの活動を通じて、酒場は経営内や街頭など労働者の他の日常的空間での活動とも結びつく可能性をもつことになったのである¹⁴¹⁾。

他方で、すでに指摘したように、極めて同質的に構成されるプロレタリア的な酒場公共圏は、労働者ミリューの濃密化を促しつつ、閉鎖性や排他性も伴っていた¹⁴²⁾。市民的公共圏における「財産と教養」のように、酒場（公

共圏)は階級的同質性、さらには「男性であること」を入場条件とした。従って、プロレタリア的な酒場公共性は最初からジェンダーの問題を内包していたのであり、労働運動が酒場との結びつきを維持して「男性の文化圏」であり続けた限り、そこへの入場資格をもたない女性たちは公共圏内で行われる集会や議論から常に排除される存在であった¹⁴³⁾。この意味で、酒場は鎮圧法の廃止以後も労働運動の活動拠点として不可欠な存在である一方で、女性労働者の運動への接近を阻み、運動の発展にとって障害となる可能性もはらんでいた。「プロレタリアの女性に社会主義が役に立たないと確信させたのは、しばしばまさに労働者酒場であった。…酒場は政治的闘争の分裂を日常的に強化し、階級の半分を排除し、それにより運動を根本の部分で弱体化させた¹⁴⁴⁾」。

さらに、市民的公共性がカフェやコーヒーハウス、あるいはサロンを舞台に理性的な議論をその主たる機能としたのに対して、プロレタリア的な酒場公共圏には暴力のポテンシャルが秘められていた。確かに第二帝政期の労働者酒場に関しては、鎮圧法時代の地下活動が「奥座敷」での集会や情報交換を中心にしてきたこともあり、暴力の問題があまり前面に出ることはなかった。しかし、19世紀後半のルール地方での暴力犯罪を検討したイエッセンの研究によると、酒場での乱闘事件は突発的に発生しており、「酒場や祝祭会場での殴り合いや刃傷沙汰は異例ではなかった¹⁴⁵⁾」。もっとも、酒場と暴力の間にある種の親和性があったとしても、それは「前工業的村落社会における公然とした儀礼的暴力の長い伝統¹⁴⁶⁾」によるものであり、政治的側面はどちらかと言えば希薄であった。こうした酒場が持つ本来は非政治的であった暴力のポテンシャルが政治的なものとして顕在化するのには、ナチスや共産党といった暴力との親和性が高い政治運動が酒場に拠点をもちワイマル共和国期ということになる。

結びにかえて

以上、本稿では19世紀後半から20世紀初頭にかけてのドイツにおける酒場と政治の関係を検討してきたが、ここで明らかとなったのは、本来は飲酒を目的とする場所であった酒場がそこに集う客(労働者)たちの社交を通して政治的機能を持ち始めたことであった。

19世紀の工業化に伴い都市では工業労働者の人口が急増し、酒場でのアルコール消費(飲酒行為)も増大していった。その結果、一方では労働者の飲酒癖(アルコール依存)とそれに関連する(とされた)社会秩序の乱れや犯罪の発生を非難する声は高まり、世紀転換期のドイツでは様々な禁酒運動が組織されていった。しかし他方で、社会主義的労働運動は、特に社会主義鎮圧法による弾圧の下で酒場に自らの拠点を発見し、そこで集会やアジテーションなどの政治活動を行った。酒場は労働運動にとって不可欠な活動の場となって一種の「公共圏」としての機能を果たし、19世紀末には「酒場公共性」とも呼ぶべき状況が生まれた。労働運動内では、カウツキーの酒場擁護論を代表としてアルコールや酒場に対する寛容論が禁酒の要求を上回り、酒場は労働運動と結びつくことで政治的になっていった。

第二帝政期に登場した「政治的酒場」はその後も継続し、冒頭でも触れたように、ワイマル期にはとりわけ労働者政党(社会民主党・共産党)が都市の労働者地区に政治的酒場を持ち、街頭活動の牙城としていた。例えば、ベルリンではヴェディングやクロイツベルクといった労働者地区に多数の政治的酒場が存在していた¹⁴⁷⁾。「酒場はワイマル共和国の間中その役割を継続した。酒場が実際に本領を発揮したストライキ期間中や選挙運動では、それは労働者の生活における連続性を示す強固で安定した施設だった¹⁴⁸⁾」。

しかし、1920年代末頃からナチスが各都市の労働者地区に独自の酒場を築くようになると、第二帝政期以来、もっぱら社会主義労働運動と接合してきた酒場は政治的に分極化していくようになった。「労働者地区には“赤い酒場 Kneipe”があり、市内のあちこちに“褐色の酒場 Kneipe”があった¹⁴⁹⁾」。その結果、政敵どうしの対立・衝突が一気に活発化し、酒場は街頭闘争の出発点としての役割を担うようになり、政治的暴力のための「街頭の戦略的基地¹⁵⁰⁾」へと変質していくことになった。ナチスにおけるこの闘争の担い手は突撃隊(SA)であった。SAは都市の労働者地区を中心に社会主義労働運動の酒場を真似た「突撃酒場 Sturmlokal」を置くことで労働者における勢力拡大を目指したが、その際、酒場を労働者酒場の向かい側に設置して、挑発行為をより効果的なものにしてしまっていたという¹⁵¹⁾。「他の多くと同じように、ナチスは労働者文化のこの特別な形態をコピーした。彼らは、街角にある酒場が政治的ミリュエの明確な形成にとって極めて重要であることと認識していた。…ナチ酒場の特殊な形態がSAの突撃酒場であった。ここでは、すでに筋金入りの者だけが集まっていた。この地区のSAはここに基盤となる宿営 Stammquartier を持っていた。プロパガンダ行進や襲撃はここで準備された。負傷者は手当てを受け、勝利や敗北の度に杯が酌み交わされた。特に30年代初頭には、労働者酒場をめぐる闘争が始まっ

た。SPD や KPD の党酒場 *Parteilokal* への恒常的な襲撃やそれに対して起こる反応が、街頭や集会場と並んで酒場を政治的戦場にした¹⁵²⁾」。

こうして第二帝政期に政治化した酒場（労働者酒場）は、ワイマル末期によりその暴力的なポテンシャルを顕在化させながら、街頭での政治的暴力の拠点となっていった。ベルリンなどの大都市の日常において、ナチスや共産党、あるいは社会民主党などの政党が持つ酒場がいかなる機能を果たし、酒場を拠点とした政治的街頭闘争はどのように展開していたのか。また、公権力（警察）はそうした事態にどう対応したのか。以上の疑問に答えるには、ワイマル期の政治的暴力を「政治的酒場」という視点から捉え直す作業が必要となるが、この点に関しては後考を期したい。

註

1) Petersen, Jan, *Unsere Straße: Eine Chronik. Geschrieben im Herzen des faschistischen Deutschlands 1933/34*, Köln 1983, S.17ff. (ヤン・ペータゼン [長尾正良訳] 『われらの街—ファシズム・ドイツの心臓部にて』新日本出版社, 1972年, 23頁以下を一部改訳)。

2) ワイマル共和国末期の街頭闘争については、拙稿「1930年代初頭のベルリンにおける政治的街頭闘争」『史学研究』282号, 2013年, 同時期の街頭と政治の関係については、同「ワイマル共和国後期ベルリンにおけるナチスのプロパガンダ活動」『鳴門教育大学研究紀要』第29巻, 2014年をそれぞれ参照。

3) Beneder, Beatrix, *Männerort Gasthaus?: Öffentlichkeit als sexualisierter Raum*, Frankfurt a.M./New York 1997, S.15, Starzinger, Annelie, *Kommunikationsraum Szenekneipe: Annäherung an ein Produkt der Erlebnisgesellschaft*, Wiesbaden 2000, S.13.

4) 古代から近代に至るまでの酒場の歴史については、以下の文献を参照。Jeschke, Ingrid, *Speise, Trank und Unterkunft: Zur Entwicklung des Gastgewerbes von der Antike bis ins 18. Jahrhundert*, in: Schwibbe, Gudrun (Hrsg.), *Kneipenkultur: Untersuchungen rund um die Theke*, Münster/New York/München/Berlin 1998, S.11ff., Hübner, Manfred, *Zwischen Alkohol und Abstinenz: Trinksitten und Alkoholfrage in deutschen Proletariat bis 1914*, Berlin (O) 1988, S.103ff., Starzinger, a.a.O., S.13ff., Wedemeyer, Georg, *Kneipe und politische Kultur*, Pfaffenweiler 1990, S.20ff. 酒場の歴史に関する邦語文献としては、海野弘『酒場の文化史』講談社, 2009年(原著初版は1983年), 下田淳『ドイツの民衆文化—祭り・巡礼・居酒屋』昭和堂, 2009年, 同『居酒屋の世界史』講談社, 2011年。

5) 「客とともに神が訪れる」という考えの下、この行為は幸福を約束する神聖な義務とされたが、反面それは旅行者の長期の逗留を招くことにもなり、もてなす側にとってかなりの負担になった。こうした状況から「客と魚が新鮮なのは3日だけ」という格言も生まれ、中世には客の長期滞在を防ぐ様々な法令が出されたほどであった (Jeschke, a.a.O., S.11f.)。

6) Ebenda, S.18.

7) Constantin, Theodor, *Alt-Berliner Kneipen*, Berlin 1989, S.7.

8) Wedemeyer, a.a.O., S.11. また、ギールも酒場に対する一般的なイメージとして一方で「飲酒場所, およびアルコール消費とそれによってもたらされる付随現象を促進・助長する施設」, 他方で「酒場独特の不気味さ, 惨めな内部設備, アルコールの販売, 窮屈な近さ, 騒音, 悪臭, 汚物, おかしな者たち, いかがわしさにより際立つイメージの複合体」を挙げた上で、さらにもう一つの側面, すなわち「社交, 伝統, 牧歌的な仕事後の快適さ, 親密さ, 親しさ, 常連の雰囲気, 酒場の詩情」を示して従来の酒場イメージを修正する必要性を説いている

(Gyr, Ueli, *Kneipen als städtische Soziotope: Zur Bedeutung und Erforschung von Kneipenkulturen*, in: *Österreichische Zeitschrift für Volkskunde*, Bd.XLV/94 [1991], S.97)。

9) Schwibbe, Gudrun, *Forschungsfeld: Kneipenkultur*, in: dies. (Hrsg.), a.a.O., S.2.

10) Roberts, James S., *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, in: Huck, Gerhard (Hrsg.), *Sozialgeschichte der Freizeit: Untersuchungen zum Wandel der Alltagskultur in Deutschland*, Wuppertal 1980, S.123, ders., *Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert*, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 6.Jg. Heft 2 (1980), S.221. Vgl. Ders., *Drink and working class living standards in late 19th century Germany*, in: Conze, Werner u. Engelhardt, Ulrich, *Arbeiterexistenz im 19. Jahrhundert: Lebensstandard und Lebensgestaltung deutscher Arbeiter und Handwerker*, Stuttgart 1981, ders., *Drink and*

the labour movement: the Schnapsboycott of 1909, in: Evans, Richard J.(ed.), *The German working class 1888–1933: the politics of everyday life*, New Jersey 1982, ders., *Drink, temperance and the working class in nineteenth-century Germany*, Boston 1984.

11) Gyr, a.a.O., S.100.

12) Abrams, Lynn, Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet (1850–1914), in: Kift, Dagmar (Hrsg.), *Kirmes–Kneipe–Kino: Arbeiterkultur im Ruhrgebiet zwischen Kommerz und Kontrolle (1850–1914)*, Paderborn 1992, S.42.

13) Ebenda, S.34. エイブラムスは日常史研究が取り組む労働者の余暇文化の対象として「祭りと大市 *Jahrmarkt*, 飲酒, ダンス, ミュージックホールとヴァリエテ, サークスと動物園, 協会, 酒場 *Kneipe*, 講演, 図書館, スポーツ, 映画館」を挙げており, それが「労働者のメンタリティやレクリエーション的娯楽の全体を包括する文化的表現領域」を解明する点を強調している。また, 別の個所で, 彼女は酒場の機能として, 地域の活動の中心, 集会場所, 労働仲介, レクリエーションの舞台, コミュニケーションの中心を挙げており, 「ここで, 人は良き社交を享受し, 温かい食事にありつき, 新聞を読み, ビールや火酒をお供にして最新の話題について議論した」と述べている (Abrams, Lynn, *Workers' culture in imperial Germany: Leisure and Recreation in the Rhineland and Westphalia*, London/ New York 1992, p. 65)。

14) Dies., Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet, S.35.

15) Hoffrogge, Ralf, *Sozialismus und Arbeiterbewegung in Deutschland von Anfängen bis 1914*, Stuttgart 2011, S.106.

16) Starzinger, a.a.O., S.4.

17) Bener, a.a.O., S.18.

18) 「酒場」あるいはそれに近い「飲食店」を意味するドイツ語の単語は, 例えば, 「*Kneipe*」, 「*Lokal*」, 「*Gaststätte*」, 「*Gastwirtschaft*」, 「*Gasthaus*」, 「*Wirthaus*」, 「*Schenke*」など日本語と比較するとかなり多い。イエシュケは, 古代以来使用されてきた酒場や飲食店を示す50もの単語を挙げている (Jeschke, a.a.O., S.16f.)。本稿では, 煩雑を避ける意味もあり, 基本的にこれらの単語を「酒場」として一括して訳し, 必要に応じて他の訳語を当てたい。

19) Abrams, Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet, S.41, dies., *Workers' culture in imperial Germany*, pp.64f.,

20) Roberts, Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert, S.222f., 229ff.

21) Heggen, Alfred, *Alkohol und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert: Eine Studie zur deutschen Sozialgeschichte*, Berlin 1988, S.126ff.

22) Hoffrogge, a.a.O., S.107.

23) 19世紀後半のアルコール消費の変化については, Heggen, a.a.O., S.118f., Roberts, Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert, S.226ff.

24) Roberts, *Drink, temperance and the working class in nineteenth-century Germany*, pp.109ff. ロバーツは「おそらくは19世紀のアルコール問題の核心であったこと—すなわち, 労働者が基本的な生理的欲求を満たすためにアルコールを飲まざるを得なかったこと—は, 徐々にそして不規則的ではあったが, 第一次世界大戦前の10年間で大部分が克服された」とし, 「食事が改善され, 労働者階級のエネルギー欲求が十分に満たされることができるようにつれて, 飲酒の必要性は減じていった」と述べている (Ders., *Drink and working class living standards in late 19th century Germany*, pp.85ff.)。また, 彼は別の論文で労働者のアルコール消費量の減少を実質賃金の上昇と消費行動の変化と関連づけて, 消費対象としてアルコールの位置づけの低下, 生活コストの上昇に伴うアルコール支出の抑制, 他の消費財 (住居・家具, 衣料品や他の食料品など) への支出の増加を指摘している (Ders., *Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert*, S.228)。

25) Ebenda.

26) Ders., *Drink and working class living standards in late 19th century Germany*, p. 89.

27) Abrams, Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet, S.43.

28) Grotjahn, Alfred, *Der Alkoholismus nach Wesen, Wirkung und Verbreitung*, Leipzig 1898, S.273.

29) Roberts, *Drink and working class living standards in late 19th century Germany*, pp.76ff.

30) Ibid., pp.78f.

- 31) Dröge, Franz / Krämer-Badoni, Thomas, *Die Kneipe: Zur Soziologie einer Kulturform oder »Zwei Halbe auf mich!«*, Frankfurt a.M. 1987, S.105.
- 32) 社会問題としての「アルコール問題」については, Heggen, *a.a.O.*, S.112, 122ff.
- 33) Hoffrogge, *a.a.O.*, S.108.
- 34) 1880年代以降のドイツにおける禁酒運動については Tappe, Heinrich, *Auf dem Weg zur modernen Alkoholkultur: Alkoholproduktion, Trinkverhalten und Temperenzbewegung in Deutschland vom frühen 19. Jahrhundert bis zum Ersten Weltkrieg*, Stuttgart 1994, S.281ff. 第一次世界大戦前のドイツには大小さまざまな禁酒・節酒組織が結成されており, 「ドイツ反アルコール濫用協会」を含む15の団体が23万人の会員数を抱えていた (*Ebenda*, S.356)。
- 35) *Volksbildung und Kneipenleben: Vortrag gehalten zu Stettin auf der 16. Generalversammlung des Deutschen Vereins gegen den Missbrauch geistiger Getränke am 28. September 1899 von Dr. Ernst Schultze*, Stettin 1900, S.10ff.
- 36) Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.103. 「人口の大量増加と都市中心部における労働者階級の集中は, 19世紀後半における酒場数の急速な増加の前提条件だった」(Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 66)。
- 37) Kaufmann, Ines, *Zur Entwicklung der Kneipe im 19. und 20. Jahrhundert*, in: Schwibbe (Hrsg.), *a.a.O.*, S.23. ルール地方の労働者文化に関するエイブラムスの研究によると, 19世紀の工業化の進展に伴うこの地方への農村からの都市への労働力の流入(工業労働者層の形成)は, 同時に農村での伝統を引き継いだ労働者文化を成立させた。その一つが「キルメス Kirmes (教会堂開基祭)」という祝祭であり, それは元来, 礼拝や行列といった教会の行事にゲーム・ダンス・ギャンブル・屋台や見世物小屋などの娯楽を加えたものであった。19世紀後半には娯楽性のみが前面に出るようになり, キルメスは日々の厳しい労働規律からの逸脱行為として労働者の娯楽という性格が強くなっていった。夏から秋にかけて数日単位で開かれるキルメスに行くことを禁止された労働者の中には, 抗議の手段として労働をサボタージュする者すらいたという。こうした日常からの逸脱的性格を持つ伝統的な農村の祝祭行為が新たに形成された都市労働者層によって積極的に維持され, そこに都市労働者の余暇文化が生まれる素地が生じたが, この文化はブルジョア文化はもちろん, 一定のリテラシーを必要とする社会主義的労働者文化とも一線を画する民衆的性格を持っていた。こうした非日常的な逸脱行為としての祝祭=キルメスは, 都市労働者の余暇文化の一端としての「酒場 Kneipe」にも接続していくことになった (Abrams, *Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet*, S.35ff.)。
- 38) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.125.
- 39) Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, pp.66ff.
- 40) Roberts, *Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert*, S.238.
- 41) Constantin, *a.a.O.*, S.24. コンスタンティンによると, 1905年のベルリンには人口157人につき1軒の酒場が存在していた計算となるが, 1980年代には714人につき1軒の酒場, 飲食店に広げても400人につき1軒であり, 世紀転換期における酒場の多さが明らかとなる。「19世紀後半における酒場の社会的機能は人口に対する飲み屋の数の多さからもはっきりしてくる」(Heggen, *a.a.O.*, S.133)。
- 42) Starzinger, *a.a.O.*, S.22.
- 43) *Lokal-Termin in Alt-Berlin: Ein Streifzug durch Kneipen, Kaffeehäuser und Gartenrestaurants*, unternommen v. Paul Thiel, Berlin (o) 1989, S.16.
- 44) Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p.68.
- 45) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.124.
- 46) Vgl. Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.106ff., Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 68, Kaufmann, *a.a.O.*, S.23ff. サラリーマン酒場は会社帰りの基本的欲求の充足(渴きの癒し)や商取引, 同僚との打ち合わせなどを目的とした立ち飲みの酒場が中心であり, そこに労働者酒場のような常連感情や政治的社交感情は希薄であった。家庭を中心に非習慣的に社会生活を営む職員層(サラリーマン)が出入りする酒場は生活の一部として酒場が存在する労働者層の場合とは異なっていた。
- 47) Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.107.
- 48) Kaufmann, *a.a.O.*, S.23.
- 49) Roberts, *Drink and working class living standards in late 19th century Germany*, p. 74.

- 50) Vgl. Heggen, *a.a.O.*, S.122ff. 「もし飲酒問題の原因が飲酒する個人の選択よりもむしろ産業資本主義の欠点のせいであるならば、既存の社会秩序の中にその解決策など存在しえなかった。飲酒問題に取り組む唯一の適切な方法は、したがって社会的・経済的・政治的状况を根本的に攻撃することであった」(Roberts, *Drink and the labour movement*, p. 83)。ロバーツは飲酒問題に対する社会主義労働運動とブルジョア的禁酒運動の間の差異から生まれる「理論的難問」を以下のように指摘している。「禁酒運動は哲学的理想主義に、労働運動は唯物論に根づいていた。禁酒改革主義者は自己刷新のみがより良い社会を創造できると信じていたが、社会主義者は社会的世界の転換が個人々の潜在性を解放するためには必要だと思っていた。禁酒改革主義者は個人が自らの飲酒をコントロールできる、そしてこれが社会改良への鍵だと信じていた。社会主義者は大酒飲みは敵対的な環境に対する不可避の反応であり、社会主義だけが飲酒問題に対する回答を提供できると信じていたのである」(Ders., *Drink, temperance and the working class in nineteenth-century Germany*, p. 84)。
- 51) フリードリヒ・エンゲルス (一条和生・杉山忠平訳) 『イギリスにおける労働者の状態 — 19世紀のロンドンとマンチェスター』(上) 岩波文庫, 1990年, 201頁以下 (原著初版は1845年)。
- 52) Heggen, *a.a.O.*, S.125.
- 53) Grotjahn, *a.a.O.*, S.240.
- 54) Heggen, *a.a.O.*, S.125.
- 55) Roberts, *Drink and the labour movement*, p. 84.
- 56) Groschopp, Horst, *Zwischen Bierabend und Bildungsverein: Zur Kulturarbeit in der deutschen Arbeiterbewegung vor 1914*, Berlin 1985, S.64.
- 57) Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 83.
- 58) Roberts, *Drink and the labour movement*, p. 84. DAAB 自体の組織規模も巨大な社会主義労働運動内では決して大きいものではなく、1913年頃の会員数は6500人程度にとどまっていた。同時期の労働者体操協会は187,000人、労働者合唱協会は165,000人、労働者サイクリング協会は150,000人の会員を数えていた(Groschopp, *a.a.O.*, S.45, Tappe, *a.a.O.*, S.356)。
- 59) 社会主義労働運動内では、シュナップス(火酒)が飲酒癖を招くものとして攻撃の対象とされ、ビールは望ましい社会民主主義的なアルコールとされていた(Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.255)。1906年にドイツ全土でビールへの課税と値上げが行われると、社会民主党員の労働者たちは一斉に抗議活動を行った。「社会民主党員たちに支持されたビール戦争が示したのは、飲酒がどれくらい工業労働者階級の日常生活の中で重要な役割を果たし続けたかということだった」(Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 83)。
- 60) Hoffrogge, *a.a.O.*, S.111.
- 61) *Ebenda*.
- 62) Roberts, *Drink and the labour movement*, p. 82.
- 63) *Ibid*.
- 64) Kautsky, Karl, *Der Alkohokismus und seine Bekämpfung*, in: *Die Neue Zeit*, Nr.9/II (1890/91), S.1-8, 46-55, 77-89, 105-116.
- 65) Hübner, *a.a.O.*, S.121.
- 66) Kautsky, *a.a.O.*, S.5.
- 67) *Ebenda*, S.48.
- 68) *Ebenda*, S.111.
- 69) *Ebenda*, S.51. 「何千年も前から人間はアルコール飲料を味わってきた。それに対して、大衆現象としての飲酒癖は比較的新しいものである。それは資本主義的生産様式ほどは古いものではない。この生産様式の下で、そしてそれによって、飲料と飲酒における…あの変化は生じたのであり、それが場合によってはアルコールを毒にしまった」(*Ebenda*, S.3)。
- 70) *Ebenda*, S.1.
- 71) *Ebenda*, S.87.
- 72) *Ebenda*, S.88.
- 73) *Ebenda*, S.108.
- 74) *Ebenda*, S.52ff.
- 75) *Ebenda*, S.55.

- 76) Ebenda, S.106f.
- 77) 「社会民主党の禁酒運動家やブルジョア的慈善家に対して向けられたカウツキーの議論の中心は、ドイツ労働運動における酒場の政治的役割である」(Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.258f.)。
- 78) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.127.
- 79) Wedemeyer, *a.a.O.*, S.24.
- 80) *Lokal-Termin in Alt-Berlin*, S.21.
- 81) Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.260.
- 82) Starzinger, *a.a.O.*, S.16. Wedemeyer, *a.a.O.*, S.21. ドイツ農民戦争では宿屋 *Gasthof* や村の居酒屋がアジテーションや会合の場所となり、騒動の中心となっていたという (Ebenda)。
- 83) Starzinger, *a.a.O.*, S.16.
- 84) Ebenda, S.2. 労働者集会や労働者が出入りする酒場でスパイが突然「皇帝万歳」を唱え、そこで起立しなかったり、脱帽しなかった者が不敬罪で告発されたという (Straßer, Gert, *Zur sozialen Funktion der Kiezkeipe: Eine empirische Untersuchung auf der Grundlage einer aus historischen Erkenntnissen gewonnenen Fragestellung in einem Stadtteil von Berlin-Spandau*, Diss. Berlin 1986, S.14)。
- 85) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.131ff.
- 86) Ebenda, S.132. ヘッゲンも「こうした酒場だけが、党や労働組合の集会を開催する可能性を提供した」と同様の指摘を行っている (Heggen, *a.a.O.*, S.136)。
- 87) 社会主義者鎮圧法については, Hoffrogge, *a.a.O.*, S.77ff., 望田幸男「ビスマルクの時代」成瀬治ほか編『世界歴史体系ドイツ史 2 : 1648年~1890年』山川出版社, 1996年, 440頁以下, 須藤博忠『ドイツ社会主義運動史』日刊労働通信社, 1968年, 226頁以下。
- 88) Hoffrogge, *a.a.O.*, S.80.
- 89) 若尾祐司「工業化の進行と社会主義」同／井上茂子編著『近代ドイツの歴史 — 18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房, 2005年, 133頁。
- 90) Wedemeyer, *a.a.O.*, S.24.
- 91) Straßer, *a.a.O.*, S.15. 「労働者たちは特定の酒場で会い、可能であればそれどころか昔からの常連酒場を訪れたが、このことは、そこで社会民主党員や他の組織労働者たちが引き続き非合法の集会を行うことを示していた」(Ebenda, S.17)。
- 92) Ebenda, S.18.
- 93) Kautsky, *a.a.O.*, S.107.
- 94) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.130.
- 95) 「社会主義者鎮圧法の時期において、酒場は労働運動の中心的な逃避場所だった。労働運動は酒場の奥座敷で比較的無傷で禁止を乗り越えた」(Hoffrogge, *a.a.O.*, S.110)。
- 96) Reibe, Axel, *Mit den Sturmabteilungen der NSDAP fängt es an*, in: Verein zur Erforschung und Darstellung der Geschichte Kreuzberg e.V.(Hrsg.), *Kreuzberg 1933: Ein Bezirk erinnert sich*, Berlin 1983, S.47. Vgl. Dröge/ Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.287.
- 97) Hübner, *a.a.O.*, S.107.
- 98) Straßer, *a.a.O.*, S.13.
- 99) Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 81. 「たいていの場合、経済的困難を抱えるか、社会主義運動に近い関係にあったような酒場主人が部屋を使用させた。というのも、彼ら自身が労働者であり、自らの考え方が理由で職場を失ったからであった」(Kaufmann, *a.a.O.*, S.23)。
- 100) Roberts, *Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert*, S.239. 「特に社会主義者鎮圧法下で大きくなった政治的迫害の危険にもかかわらず、社会民主党員に部屋を使わせた主人たちは、かなりのお返し、とりわけ定期的な常連客を計算することができた。酒場営業は一般に基盤が弱く、競争は激しかった。労働運動への結びつきは、酒場経営者の存立問題を解決するのに役立つ」(Ders., *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.128)。
- 101) Ebenda, S.131, Straßer, *a.a.O.*, S.20.
- 102) シュナップスカジノについては, Abrams, *Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet*, S.40f., Dröge/ Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.259f., Kaufmann, *a.a.O.*, S.25, Wedemeyer, *a.a.O.*, S.24f.

なお、1896年には協同組合にも営業許可が義務付けられたため、「シュナップスカジノ」は衰退していった。

103) *Ebenda*, S.25.

104) Abrams, *Zur Entwicklung einer kommerziellen Arbeiterkultur im Ruhrgebiet*, S.41.

105) Groschopp, *a.a.O.*, S.28.

106) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.130.

107) Starzinger, *a.a.O.*, S.23.

108) Straßer, *a.a.O.*, S.15.

109) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.127.

110) Hübner, *a.a.O.*, S.119.

111) Starzinger, *a.a.O.*, S.1.

112) Grotjahn, *a.a.O.*, S.232. Vgl. Becher, Ursula A., *Geschichte des modernen Lebensstils: Essen–Wohnen–Freizeit–Reisen*, München 1990, S.104.

113) Hübner, *a.a.O.*, S.120. ロバーツの以下の指摘も同様の意味を持つ。「たいていの労働者にとって、アルコール消費とそれに結びついた社交は楽しみであり、ごくわずかなものしかそれを放棄しようとしなかった。そのことは労働者に当てはまるだけではなかったが、酒場は労働者層の日常の中で他の社会階層の所属者よりも多様かつ重要な機能をもっており、従って、社会によって守られた家庭というブルジョアの理想と対立する特殊で半公共的な労働者文化の出発点を形作った」(Roberts, *Der Alkoholkonsum deutscher Arbeiter im 19. Jahrhundert*, S.241)。

114) Ders., *Drink, temperance and the working class in nineteenth-century Germany*, p.115f.

115) 「社交的欲求に対して、アルコールの消費は酒場の訪問者にとってどちらかと言えば副次的役割を果たしているということである。確かに酒場ではアルコールを飲むが、それが酒場を訪れるもっぱらの動機であることは極めてまれである」(Starzinger, *a.a.O.*, S.6)。

116) Gyr, *a.a.O.*, S.101.

117) *Ebenda*.

118) *Ebenda*, S.103ff.

119) *Ebenda*, S.108f.

120) Dröge/Krämer–Badoni, *a.a.O.*, S.75.

121) *Ebenda*, S.73.

122) *Ebenda*, S.75f.

123) Starzinger, *a.a.O.*, S.1.

124) Wedemeyer, *a.a.O.*, S.29. 「誰もがすべての酒場に入るのではなく、誰もがすべての酒場に入ることはできないし、入ってはいけない。特定の種類の酒場は古くから特定の社会集団のために“予約”されている」(*Ebenda*)。

125) Habermas, Jürgen, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt a.M. 1990, Neuauflage (J・ハーバーマス(細谷貞雄・山田正行訳)『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求(第2版)』未来社, 1994年)。

126) *Ebenda*, S.268 (同上書, 232頁)。

127) *Ebenda*, S.86 (同上書, 46頁)。

128) *Ebenda*, S.88 (同上書, 48頁)。

129) Wedemeyer, *a.a.O.*, S.21ff.

130) Starzinger, *a.a.O.*, S.18f.

131) Habermas, *a.a.O.*, S.56 (ハーバーマス, 前掲書, 13頁)。

132) *Ebenda*, S.87 (同上書, 47頁)。「市民的公共性は、一般公開の原則と生死をともにする。一定の集団をもとと排除した公共性は、不完全な公共性であるだけでなく、そもそも公共性ではないのである。だからこそ、市民的法治国家の主体として通用しうる公衆は、自分たちの圏をこの厳密な意味での公共性として理解し、彼らの反省的検討の中で原理的には万人の帰属性を先取りしているのである」(*Ebenda*, S.156 [同上書, 116頁])。

133) *Ebenda*, S.157 (同上書, 116頁)。

134) 佐藤卓己『大衆宣伝の神話—マルクスからヒトラーへのメディア史』弘文堂, 1992年および同「ファシス

ト的公共性 — 公共性の非自由主義モデル』『民族・国家・エスニシティ』(岩波講座現代社会学24)岩波書店, 1996年を参照。

135) Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.281.

136) *Ebenda*, S.285. 同様に, ベネダーも「酒場」を政治的公共圏の視点から問い直し, 「酒場の意見形成力」を指摘している。その際, 彼女は酒場という空間の機能として「感覚性 *Sinnlichkeit*」(酔い心地, 社交, 愉快さ, 性的欲求)の充足だけでなく, 「公共的性格」(日常の秩序や規律に対する反抗, 支配的秩序に対する批判や怒り)の発露を挙げ, 後者の中に酒場の政治的な側面を見ている (Beneder, *a.a.O.*, S.13ff.)。

137) Grotjahn, *a.a.O.*, S.234.

138) Beneder, *a.a.O.*, S.19. 19世紀後半における公共性の解体を指摘して, 労働運動の台頭の中に公共性の存在を認めなかったハーバーマスも『公共性の構造転換』の第二版(1990年)の序言の中で, 市民的公共性以外の「サブカルチャーや階級に特有のいくつかの公共圏」(人民的公共圏 *plebejische Öffentlichkeit*) の存在を認めるに至っている (Habermas, *a.a.O.*, S.17 [ハーバーマス, 前掲書, vi 頁])。

139) Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.261.

140) Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.127. 「“貧者のサロン”としての酒場は新しい公共性, つまり強制的な従属関係のない別の社会的関係をもたらした。それはプロレタリア階級の組織の場所であり出発点であった」(Hübner, *a.a.O.*, S.112)。

141) 「酒場公共性の政治的構造に関して, 初めから中心となるのは, そこで活動する個々人の具体的・日常生活関連との密接な絡み合いである」(Dröge/Krämer-Badoni, *a.a.O.*, S.286)。

142) *Ebenda*, S.73 u. 286, Wedemeyer, *a.a.O.*, S.25.

143) 「酒場と政治生活の間の結びつきは, 結局のところ, 性別間の伝統的な役割分担を確認し, 強化することになった。第一次世界大戦前には労働運動に女性がますます関与するようになったとはいえ, SPD と自由労働組合は男性によって支配されたままであった。…政治における男性の優位は労働運動が酒場に依存することによって強化された」(Roberts, *Wirthaus und Politik in der deutschen Arbeiterbewegung*, S.138)。

144) Hoffrogge, *a.a.O.*, S.112f.

145) Jessen, Ralph, *Gewaltkriminalität, Ruhrgebiet zwischen bürgerlicher Panik und proletarischer Subkultur (1870–1914)*, in: Kift (Hrsg.), *a.a.O.*, S.238.

146) *Ebenda*.

147) Straßer, *a.a.O.*, S.28.

148) Abrams, *Workers' culture in imperial Germany*, p. 84.

149) Constantin, *a.a.O.*, S.28.

150) *Ebenda*.

151) Reibe, *a.a.O.*, S.49. シュトラッサーはナチスによる酒場の設置を「ナチズムによる労働者文化の特別な形態の習得 *Aneignung*」と呼んでいる (Straßer, *a.a.O.*, S.28)。

152) Reibe, *a.a.O.*, S.47.

【付記】本稿はJSPS 科研費(基盤研究(C), 課題番号: 25370865)の助成による成果の一部である。

Die Kneipen und „Politik“ im deutschen Kaiserreich

HARADA Masahiro

Der Zweck dieser Abhandlung ist die Beziehung zwischen den Kneipen und „Politik“ bzw. die politische Funktionen der Kneipen aufzuklären, indem ich die Beziehung der sozialistischen Arbeiterbewegung mit den Kneipen im deutschen Kaiserreich in Betracht ziehe.

Infolge der Industrialisierung im 19. Jahrhundert wuchs die Arbeiterbevölkerung in den deutschen Städten rasch, wodurch auch der Alkoholkonsum in den Kneipen stieg. Das führte auf der einen Seite zu Alkoholismus unter den Arbeitern. Die damit zusammenhängende Verwirrung der sozialen Ordnung und Zunahme der Verbrechen wurden kritisiert: infolgedessen waren um die Jahrhundertwende die Abstinenzbewegungen entstanden. Auf der anderen Seite hatte jedoch die sozialistische Arbeiterbewegung in den Kneipen ihre Stützpunkte gefunden und dort politische Tätigkeiten, wie etwa Treffen, Versammlungen, Schulungen und Agitationen, entfaltet. In der Arbeiterbewegung wurde die Akzeptanz von Alkohol (insbesondere Bier) und den Kneipen immer stärker als die Abstinenz, nachdem Karl Kautsky im Jahr 1890/91 die Aufsätze zur Verteidigung der Kneipen veröffentlicht hatte.

Seit der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts hatten die Arbeiter in den Kneipen über politische Angelegenheiten diskutiert, Informationen ausgetauscht und Zeitung oder Zeitschriften gelesen. Die Kneipen funktionierten also als eine Art „politische Öffentlichkeit“ (Gasthausöffentlichkeit/Kneipenöffentlichkeit). Das war auch eine Gegenöffentlichkeit zur bürgerlichen Öffentlichkeit, die sich im 18. Jahrhundert in Cafés und Kaffeehäusern entwickelte. Durch die Verbindung mit der Arbeiterbewegung waren die Kneipen um die Jahrhundertwende immer politischer geworden.

Die politischen Kneipen, die in den 1890er Jahren entstanden waren, radikalisierten sich deutlich in der Weimarer Republik als ein Ausgangspunkt der Straßenkämpfe zwischen den politischen Kräften, wie den Nationalsozialisten, den Kommunisten oder den Republikanern, indem sie ihre eigenen Verkehrslokale gegründet hatten. Die gewalttätigen Potentiale, die die Kneipen in sich geborgen hatten, waren damit in den Vordergrund gerückt.